

滋賀県立大学 研究シーズ集 2024 の発刊にあたり

本学は文系から理系まで幅広い学問分野について4学部13学科と全学附属施設等を有し、そこでは約200名の教員が各々の専門分野に取り組んでいます。地域人材の育成や地域課題の解決に向けた取組、産学官連携を強化し、地域貢献のリーディングモデルとなることは本学の目標の一つです。この目標を達成するために、本学産学連携センターは地域と大学を結ぶ窓口として、地域連携や産官学連携の推進のために活動しています。

この研究シーズ集は、教員の研究活動やその成果、研究者が持つ知識や技術をわかりやすく紹介することで、地域や産業界の皆様にご覧いただき、広く活用していただくことを目的として、2005年度から発刊しています。

このたび作成した「研究シーズ集 2024」には、2022年版から18名の内容を追加した145名の教員を掲載しています。技術相談や共同研究、受託研究の「シーズ」として、更にはリカレント教育やリスキリングの講師選びや採用活動の資料としてもご利用ください。

本シーズ集が、イノベーションの創出や地域社会の発展に少しでも貢献できれば幸いです。

なお、このシーズ集は当センターのホームページにも掲載いたします。本学の研究シーズに興味を持っていただいた皆様には、お気軽に当センターまでご連絡いただきご相談くださいますよう、お願いいたします。

2024年 8月

公立大学法人滋賀県立大学
産学連携センター長 松岡 純

〈研究シーズ〉 目次

学部学科等	職名	氏名	タイトル	ページ
全学共通教育推進機構	准教授	坂本 輝世	対話としての英語表現力の育成—言語使用者としての発達を目指して—	141
	講師	サンフォ ジャンパティスト	Factors of Rural-Urban Learning Achievement Inequalities in Francophone Sub-Saharan African Primary Education.	142
地域共生センター	教授	鶴飼 修	地域特性を活かした「地域ビジョン」の創造支援 ～地域診断法及び総合的な学習の時間における展開～	143
	講師	上田 洋平	「あたりまえの暮らし」と「無事の文化」を守る まちづくり手法の開発・地域づくり人材の育成	144

<研究者別 研究分野・キーワード一覧>

146-149

※ SDGs 目標別の研究シーズ：SDGs 目次を参照してください。



対話としての英語表現力の育成 — 言語使用者としての発達を目指して —

関連するSDGsの国際目標



全学共通教育推進機構 准教授 坂本 輝世
研究分野：外国語教育論、ライティング教育

概要：日本語を母語とする英語学習者が、リーディング／ライティング学習によって対話としての英語表現力を発達させるためには、どのような指導・援助が可能か、また、そのような英語表現力を育成することの利点は何なのか、について研究しています。

■ 英語ライティング学習における「構成・組織化」の問題

日本語母語話者である英語学習者の書く議論文について自分の立ち位置をはっきりさせなかったり、議論の一貫性に欠けたりする傾向が指摘されてきています。しかも、構造面での問題は文法や語法に比べても指導が難しく、説明だけではなかなか学習者に理解されにくいことも、これまでの研究で明らかになっています。そこで、学習者の書いた議論文を図式化し、視覚的に自分のテキストを俯瞰することで、より良い指導と学習が可能になるのではないか、という仮説に基づく研究をしています。

■ 樹状図による文と文の繋がりにへの気づき

TIARAという注釈ツールを用いると、学習者の書いた英語パラグラフの文の配列を図式化し、英語の議論文として不適切な文の流れを明示できます。これによって学習者の理解を助け、ひいては、注釈ツールの力を借りなくても学習者が文を適切に配列することができるようになるかどうかを実証的に確かめようとしています。

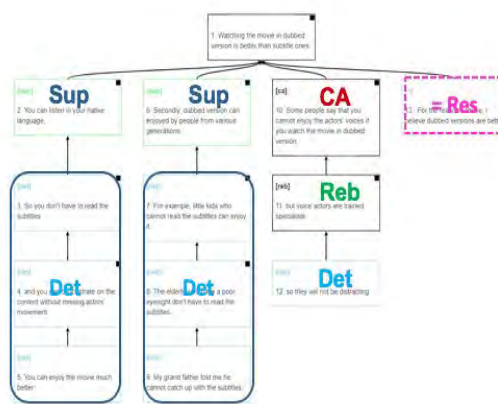
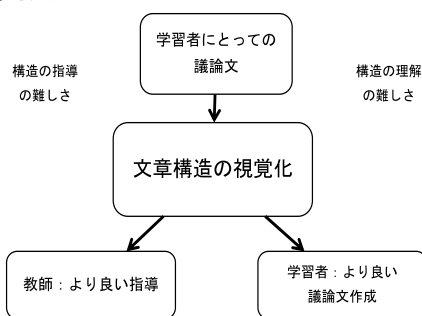
■ 対話としてのリーディング／ライティング

同時に、このような問題は、日本語と英語のいずれにおいても「対話する」という視点から議論文ライティングを学んだ経験が少ないことが一因ではないか、という視点に立ち、「批判的な読み」に基づいて自分の立場を明確にしつつも、他者との対話として議論を行い、他者の声を取り入れながら自分の声を作り上げていくためには、どのような気づきが必要なのか、その過程を観察し分析する質的研究も行っています。

■ SDGsとのかかわり

英語を日本語に、また日本語を英語に置き換えるだけなら、機械翻訳で事足ります。しかし、それぞれの言語がどのような論理構造を前提とし、どのようなスタイルを心地よく感じるか、という違いに気づかなければ、本当の意味での理解も発信もできません。さらに、同じ言葉を使うもの同士でも、相手が自分とは異なる経験と価値観をもつことを自明の出発点としなければ、他者との対話はできません。

迂遠なようですが、対立の解消が容易でない問題（例えばジェンダー平等、不平等の是正など）について考えるときにも、私たちの使う言葉そのものが、様々な対立する視点と声によって成り立っていることを知り、さらには、そのような対立を含み込むことのできる言葉を一一つ創り出していくことが重要だと思っています。



樹状図の一例

Factors of Rural-Urban Learning Achievement Inequalities in Francophone Sub-Saharan African Primary Education.

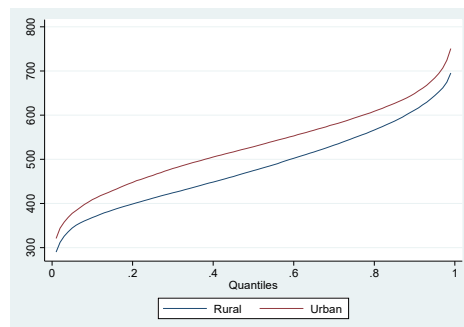


全学共通教育推進機構 講師 SANFO M. B. Jean-Baptiste
 研究分野：教育・教育開発・教育経済学

Access to education has increased in Sub-Saharan Africa, but countries face a learning crisis exacerbated by rural-urban learning achievements inequalities. Literature suggests that tangible as well as intangible factors explain rural-urban learning inequalities. The current research investigates the proportion that each type of factor explains in the rural-urban learning inequalities and it uses re-centered influence function decomposition with the Program for the Analysis of Education Systems” (PASEC) 2014 data.

More access to education does not necessarily mean learning.

Access to education has increased globally, but many students in developing countries do not learn because these countries are facing a learning crisis. The crisis is exacerbated by rural-urban learning achievements inequalities observed in many regions, including Sub-Saharan Africa, with evidence that urban areas tend to outperform rural ones. Eliminating inequalities may contribute to local socioeconomic development, and it can also help local communities adapt to the fast-changing environment we all face.



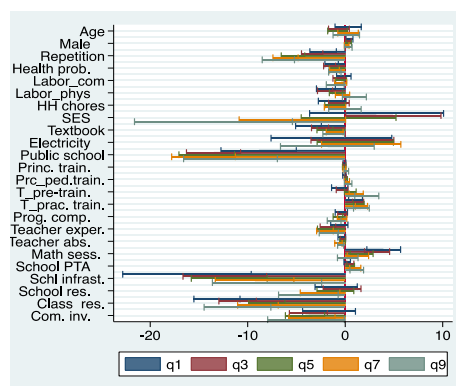
Rural-urban mathematics inequalities in Francophone Africa (Benin, Burkina Faso, Burundi, Cameroon, Chad, Congo, the Ivory Coast, Niger, Senegal, Togo)

Tangible factors explaining rural urban learning achievements.

School factors explain learning inequalities more than family ones.

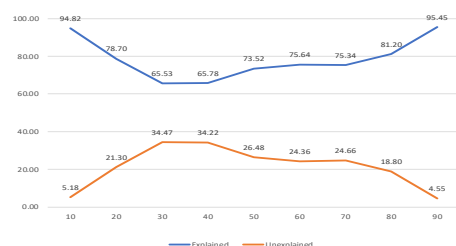
Intangible factors explaining rural-urban learning achievements

Intangible factors account for 4.50 to 34.50% of the achievements inequalities and seem to be more important for students on the lower tail of the distribution.



Factors of rural-urban mathematics inequalities

Learning inequalities can be reduced by addressing both tangible and intangible factors explaining them. Intangible factors need to be captured through qualitative studies.



Tangible VS intangible factors of inequalities

地域特性を活かした「地域ビジョン」の創造支援 ～地域診断法及び総合的な学習の時間における展開～

関連するSDGsの国際目標



地域共生センター 教授 鵜飼 修

研究分野：まちづくり、地域活性化、
コミュニティビジネス

http://eco-minka.com



地域まちづくりを推進する際に「軸」となる「地域ビジョン」を設定し、共有する手法「地域診断法」のノウハウを提供します。集落での基本計画づくりや、小学校の総合的な学習における地域まちづくり学習のコンテンツも提供することができます。

■地域診断法

地域診断法は、地球環境と共生した人間社会、地域の特性を活かした地域活性化を目指して、地域のあるべき方向性を明らかにする手法です。調査形式と住民参加によるワークショップ形式があります。調査形式では、設定されたテーマに対して、エコロジカルプランニングの視点で地域の特徴をマトリクス分析し、バックキャストिंगのための、地域のあるべき方向性、キャッチフレーズなどを提示します。市町村レベルから集落レベルまで対応可能です。

【実績（外部からの委託含む）】

守山市地域診断、永源寺地区地域診断 など

図1：地域診断法のマトリクス分析

■地域診断法ワークショップ

地域診断法ワークショップは、地域診断法の理念を踏襲しつつ、住民参加形式で「1日」で地域のビジョンを見出す手法です。5つのステップで構成され、ファシリテーターの指導のもと、地域住民と「よそ者」が協働してワークショップを行い、未来に継承したい地域の特徴を明らかにします。

【実績（依頼業務含む）】

彦根市下石寺町、薩摩町、上岡部町、稲枝北学区、稲枝地区まちづくり協議会、東近江市五個荘川並、米原市梓河内、井之口、福井市社南公民館 ほか



図2：地域診断法WSのハンドブック

■総合的な学習の時間における地域診断法WSの実施

小学校6年生の総合的な学習の時間における「地域学習」として地域診断法WSを応用したプログラムを開発しました（マニュアル化済み）。学習指導要領で推奨されている、探求プロセスと同様に、課題の発見、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現が繰り返し実施され、「地域」をテーマにした児童生徒の創造性・愛郷心を育むプログラムです。

【実績】

彦根市稲枝北小学校（2014、15）ESDプログラムの一環で実施
多賀町大滝小学校（2016～）多賀町のまちづくりと連動



図3：小学校用のマニュアル

<特許・共同研究等の状況>

- ・博報財団第13回助成「地域診断ワークショップを活用したまちづくり学習プログラム・ツールの開発」
2018年度、協力：多賀町大滝小学校、多賀町

地域共生センター

「あたりまえの暮らし」と「無事の文化」を守る まちづくり手法の開発・地域づくり人材の育成

関連するSDGsの国際目標



地域共生センター 講師 上田 洋平
研究分野 : 地域学、地域文化学

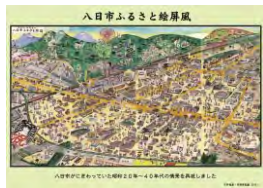
地域のあたりまえの暮らしを守り、風土に根ざした文化を再生する。「ここで、ともに、無事に、生きていける地域」を実現するための方策や場の開発に取り組んでいます。

■地域をまるごと「診察」し「無事」への処方を示す「まちづくりのホームドクター」

華やかで「高級」なものだけが文化ではありません。とくに地域文化は人々が「ここで、ともに、無事に、生きていく」ために育み磨き上げてきた「生活技術」としての側面が強い。地域文化とは「無事の技術」あるいは「無事の文化」と言うこともできます。ところがいま、地域では「無事の暮らし」を支えてきた基盤がじわじわと、しかし確実に崩れはじめており、それを「静かなる有事」と呼ぶ人もあります。

「人の空洞化・土地の空洞化・むらの空洞化」が進行するなか、いかに地域の「無事」を取り戻すのか。人と自然、人と人、人と歴史のつながりをいかに結び直し、いかに地域を持続可能にしていくのか。

むやみやたらな活性化ではなく、風土に根ざした「あたりまえの暮らし」の持続と「無事のまちづくり」、地域が誇る「ビジネスモデル」の発見と発信のために、地域での伴走支援をしています。専門家として開発し・提唱している技法もありますが、現実には、まちづくりに関わるあらゆる現場に乞われて足を突っ込んでいます。例えるなら「からだ」も「こころ」も「たましい」も、地域をまるごと「診察」し、地域の「無事」への「処方」を示す「まちづくりのホームドクター」のようなことをしています。



写真：地域の暮らしと文化を地域の人々自身が再評価し、多世代のつながりを取り戻す「ふるさと絵屏風」の手法を開発・提唱。全国50地域。

「地域」とはなんだろう

空間	人と自然 のつながり	からだ (物質性/soil)	<ul style="list-style-type: none"> わたしのからだの材料は世界中から集まってくる 原産地不明のからだ あて先不明の「いただきます」 感謝を世界に広げよう 	ここで (地球のうえで)
人間	人と人 のつながり (社会のつながり)	こころ (社会性/society)	<ul style="list-style-type: none"> だれかを助ける力、だれかに助けてもらう(愛護)力 思いやる心 「つながりが病んでいる」ならば、つながりて治す 	ともに (みんなて)
時間	人と歴史 のつながり (未来とのつながり)	たましい (歴史性/soul)	<ul style="list-style-type: none"> いのちのバトンをつないで生きる 「死が分かつ」のではなく、「死を分かち合う」共同体 「すでにいない者たち」や、「まだここにいない者たち」とも、ともに生きている 	ぶじに (未来に向けて)

まちづくりを担う人材を育成する地域共育プログラムの構築、社会人のリカレント教育、市町の人材養成プログラムの開発指導など、あらゆる「人づくり」を支援しています。

■地域づくり人材の育成

まちづくりを担う人材を地域の人々とともに育成する「地域共育」プログラムの構築・実施に取り組み、学生を地域に連れ出すほか、社会人のリカレント教育や学びなおしのプログラムづくり、市町の人材育成プログラムの開発・指導を行っています。あらゆるネットワークを活用し、さまざまな種類の人材を「まぜて・ちらして・つなぐ」人と学びのプラットフォームづくりを目指しています。



学生×地域×Xで地域の文化・暮らし再生

<特許・共同研究等の状況>

・JST-RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域研究開発プロジェクト「未病に取り組む多世代共創社会の形成と有効性検証（代表：慶應義塾大学環境情報学部渡辺賢治教授、平成26～30年度）」

【滋賀県立大学 研究者一覧】

研究者別 研究分野・キーワード一覧

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード
全学共通教育推進機構	准教授	坂本 輝世	外国語教育論、ライティング教育
	講師	サンフォ ジャンバティスト	教育開発、教育品質
	講師	真島 アマンダ	英語教授法、応用言語学
地域共生センター	教授	鶴飼 修	都市計画・建築計画、地域研究、地域計画、地域活性化、環境共生まちづくり、コミュニティ・ビジネス
	講師	上田 洋平	地域学、地域文化学

※詳しい研究者情報は、ホームページ (<http://db.spins.usp.ac.jp/>)をご覧ください。